



枝廣淳子の 賢者に備えあり 日本人をどうやって 食べさせていくのか

猛暑の影響で、野菜の値段が高騰しています。野菜が大好きな私は、買い物に行くのにため息をついています。ため息をつきながら、「年によって猛暑や冷夏で食料価格が変動するのは常ではあるけれど、それらに目を奪われているうちに、もっと大きな底流のようなトレンドに手を打てずに、手遅れにならないだろうか」と心配になります。

地球上の人が住める土地の約半分が農地として使われています。世界中の淡水の七割は食料生産に使われています。

世界的に見れば、農業は最大の産業。地球上の人々の食べ物を生産する農業は本当に大事な産業なのです。

これまでは、世界の食料生産は、世界の人口増加に追いついてきました。これからはどうなのでしょう？

まず需要側を見てみましょう。世界人口は九十数億人までまだ増える見通しです。当然ながら、人口増加につれて食料消費量も増えます。それだけではなく、国が豊かになるにつれて食生活が豊かになりますから、人口一

人当たりの食料消費量も増えていきます。途上国も経済発展につれて、食肉消費量が増えており、食肉生産のために使われる穀物もうなぎ上りに増えています。

さらに近年、もう一つの大口需要家が出てきました。「自動車」です。米国のトウモロコシなど、これまでは人間用か家畜の餌用に使われていましたが、現在ではそのうちの大きな部分が自動車の燃料用として使われています。大型のSUVを一回満タンにするためには、一人が一年間で食べるくらいの穀物が必ずやとること。私たちは今では食料をめぐってクルマと争うようになっていっています。

需要側の人口、一人当たり消費量、自動車用燃料という三つの大きなポイントを見ても、必要な食料は増大の一途となります。

では、供給側はこの増加についていけるのでしょうか。

食料を生産するにはまず土地が必要ですが、砂漠化や塩害が広がるなどして、「この六十年間に中国とインドの面積を合わせたぐらいの土地が農業に適さなくなりました」という心配な研究結果があります。

人口は増え続けているので、世界の一人当たりの農地面積は減少の一途です。

「農地が減っているなら、肥料で収量を増やせばよい」——。ええ、そう考える人が多いのですが、世界の肥料の消費量は大きく増えています。

ところが、施肥の効果が小さくなってきて

いるのです。かつては肥料をやればその分、収穫量が増えました。しかし、人間と同じく植物にも「どれだけ食べられるか、栄養を吸収できるか」には生理学的な限界があります。多くの地域で、その限界に達しつつある。つまり、肥料をやっても思ったように収穫量が増えず、単位面積当たりの穀物の収穫量があまり増えなくなってきました。

また、現代の農業は石油なしには成立しない構造になっています。「^キキサロの栄養を生み出すのに^キキサロの石油を使っている」という計算があるほどです。すでに石油生産量はピークに達し、今後は減っていくという研究者も増えています。今後の農業はこれまでのように石油をふんだんに使い続けられるのでしょうか？

加えて、「コメの収穫量は最適温度から1℃上がる度に一七%減る」という研究もある中で、温暖化は世界の農業にどのくらいの悪影響を与えるのでしょうか？ 気温上昇のみならず水資源への影響も心配です。

世界では食料生産をめぐる暴動が起こったり、自国民への供給を優先するための食料輸出の禁止や制限をする国も増えています。

短期的な価格変動に目を奪われることなく、長期的なトレンドを見据えて「日本人をどうやって食べさせていくのか」——。国はもちろん、国民各層で本質的な議論と取り組みを進める時期ではないでしょうか。手遅れになる前に……！

(幸せ経済研究所所長)